

保育者養成校における学生の音楽表現の生成過程を辿る試み —絵本を基にした造形表現と音楽表現から—

明本 遙*

要約

本研究は、吉永（2016）が提唱する子どもの音楽表現の生成過程に着目しながら、新たに学生の音楽表現の生成過程がどのようなものを辿るのかを明らかにすることを目的とする。学生の創造性を育むために科目横断的に造形と音楽を結びつけた創作活動を取り入れた授業実践をもとに、4ステップコーディングによる質的データ分析を実施した。その結果、学生が造形表現を行ううえでは、吉永（2016）の提唱する子どもの音楽表現の生成過程は概ね発生しているといえたが、音楽表現においては、吉永（2016）の生成過程を含め、3つの音楽表現の生成過程のパターンに分化することがわかった。ここから、学生の音楽表現の生成過程は子どもの音楽表現の生成過程と似通っている面があり、学生の音楽表現の生成過程を辿るうえで、吉永（2016）の提唱する子どもの音楽表現の生成過程を基本とすることは有効であることが示唆された。また、吉永（2016）の子どもの音楽表現の生成過程を辿るパターンにおいて、学生は表現に困難を感じにくい結果を得た。その他のパターンにおいては、子どもの音楽表現の生成過程に辿り着くまでに学生が困難を抱える場合があった。その困難に教員が気づき、解消するための適切な支援策を講じることで、学生が保育者となった際に、子どもの音楽表現の生成過程に寄り添うことが可能となると考えられる。そこでの具体的なアプローチを考案するきっかけとして、学生の音楽表現の生成過程のパターンを提示できたことは意義的であった。子どもの音楽表現の生成過程と比較して、学生の音楽表現の生成過程の各パターンがどのように異なっているのかが示されることで、保育者をめざす学生が、子どもの音楽表現の生成過程に寄り添うことに通ずる授業構成の具体を検討できるのである。

キーワード：音楽表現の生成過程、学生、保育者養成、表現

2023年1月3日受理

1. はじめに

幼児期の子どもは、どのようにして音楽表現を創造しているのだろうか。子どもの音楽表現に関して概観すると、例えば吉永（2016）は、子どもの内に蓄えられた音のイメージが音楽表現の創造につながり、音をいかに表現するかを試行錯誤する体験が、楽音（楽器音や歌声）の質感を見いだしていくことにつながるとしている¹⁾。安藤（2021）もまた、音や音楽的な要素を素材とした子どもの遊びを音楽表現のはじまりとして捉えている²⁾。加えて、子ども自身が多彩な音の知識や情報、イメージの獲得といった音体験を重ね、他者との共有や模倣を行うことによって、より発展した音楽表現活動の展開につながるとしている³⁾。

ただし、音楽表現につながる素材とは、音楽を構成している音素材のみにとどまらない。身の回りの音を構成する音素材をも含んでいる。例えば、自然の音や機械音、生活音、人の声といった、モノや人が関わって生み出される個々の音である。また、このような音素材のほか、視覚や触覚から得られた情報も包含される。五感を通して収集された多様な情報は表現のもととなるからである⁴⁾。

さらに、平成29年改訂の『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では、領域「表現」の内容の取扱いのなかに、「子どもの表現は、遊びや生活の様々な場面で表出されているものであることから、それらを積極的に受け

*大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

止め、様々な表現の仕方や感性を豊かにする経験になるようにすること」が加えられている。また、領域「環境」では、「自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ」ことをねらいの一つとしている。子どもは身近な自然に触れ、それらをオノマトペとして表現することも、音やそのイメージを絵で表すこともあり、日常の生活から獲得される様々な事象や音を取り込み、刺激を受け、表現を創造することができる。そして保育者には、保育者自身が身近な生活のなかにある音に気づき、またそうした音に子どもが気づくことのできる環境整備を行うことが求められる。環境が表現の創造に影響を与えることに鑑みて、保育者は、音楽表現につながる種々の素材を子どもが五感でとらえられるような環境について、十分に考慮すべきである。

加えて保育者が、さらなる子どもの音楽的感性や音楽表現の伸長を期待するとき、まず保育者自身が音楽表現できることが重要になる。では、保育者がより音楽表現できるようになるために着目できる点はどこか。その一つは、保育者養成課程における学生にとって音楽表現をする機会が充足しているかどうかであろう。その際、保育者養成課程における学生の音楽表現はどのようになされているのか、その過程を探ることが肝要になるわけである。なお先に述べたような、音素材や五感を通じた情報や環境を活用した子どもの音楽表現に、寄り添い、適切に支援することも考えるならば、学生の音楽表現の過程を探ることだけでなく、子どもが音楽表現する過程も同時に関連することになる。子どもの音楽表現の過程に関する研究としては、吉永（2016）による、2つの過程を経て音楽表現に辿り着くとした生成過程がある。しかし、この生成過程と呼ばれるものについて、学生を対象としているものは管見の限り見当たらない。とはいえ、現場に共存する子どもと学生（保育者）の音楽表現の過程がどのように異なるのかは検討されてよいことである。その際、同じ指標を用いて検討することで、結果に一定の妥当性を見いだすことができる。

そこで本研究では、保育者をめざす学生の音楽表現の生成過程がどのようなものを辿るのかを明らかにすることを目的とする。主に、音楽表現を含む表現にかかわる授業実践を経て提出された学生の振り返りシートを分析・考察するという方法をとる。本研究において、学生の音楽表現の生成過程の一端が明らかになっ

たとき、子どもの音楽表現の生成過程との比較も可能になるであろう。両者の相違を検討することで、保育者をめざす学生が、子どもによる音楽表現にいつそう寄り添うことができるための授業を考案することにつながる。

2. 音楽表現の生成過程

まずは吉永（2016）のいう音楽表現の生成過程について説明する。

子どもの音楽表現とは、既成の音楽を再現することのみではない。子どもは日々の生活のなかで、それぞれに感じたことを自分なりの音に置き換えながら楽しむことができ、これは音楽表現の一つである。蝶々を見て、《ちょうちょう》を歌い出す子どももいれば、手を羽に見立てて「ひらひら」と擬音語を付けて遊ぶ子どももいるであろう。このような直接的で素朴な子どもの表現は「芽生え部分」や「前音楽的表現」と呼ばれている⁵⁾。そうした前音楽的表現を含めた音楽表現が生成されるまでの過程について、吉永（2016）は、「感じる営み」はそれまでに経験されてきたあらゆる感性的なインプットによって育まれるものであり、またそこから、「考える営み」を経て表現が生成され、音楽表現はこうした内的過程を循環的に展開することで行われる（図1）と述べている⁶⁾。また、インプットのない表現活動はあり得ず、「感じる・考える」という過程があって表現もまた生まれるとしている⁷⁾。なおここでの「感じる営み」とは気づいたり感情を抱いたりすること、「考える営み」とは想像し

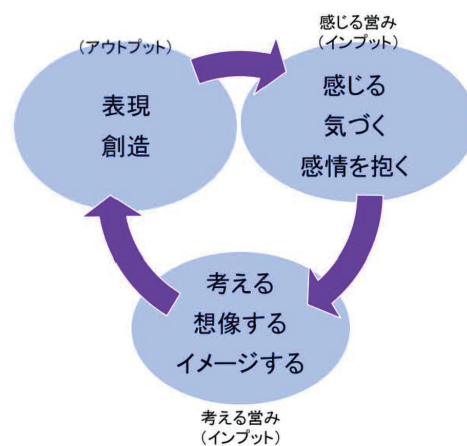


図1 音楽表現の生成過程の循環

*吉永が提示している図（吉永2016, p.25）に、「感じる営み」・「考える営み」を加え、さらにインプット部分とアウトプット部分を図に加筆している。

たりイメージしたりすることを指す⁸⁾。すなわち2つの営みと、経験に基づくインプットを要件に、音楽表現というアウトプットが行われるということである。音楽表現の生成過程とは、音楽表現を生み出すまでに辿る感覚・思考の経路である。したがって、表現に辿り着くまでには、これまでに蓄えられた経験やモノ・人との感性的な出会いが重要になってくるといえる。

これまでに領域「表現」にかかわる授業実践は多く行われ、それらの実践から得られる学びが明らかにされてきた。そのなかで音楽表現の生成過程にかかわっているということができる研究もあり、例えば、山内・持田(2022)の幼児の「表現する過程」を読み取るための授業実践がある。「音のインプット=感じる・考える」と「音のアウトプット=感じ・考えを表現する」の循環や同期が混在する体験を織り込んだ表現活動の実践を通して、幼児の表現する過程で生成される幼児の感情や学びの読み取りにおいて学生が「表現する過程」をどのように捉えたのか、その学びの観点を自由記述データのKH Coderの分析により導き出している。さらにこの結果から、幼児の「表現する過程」を適切に読み取る保育者の育成の手がかりを示唆している⁹⁾。

吉永(2016)が提唱する生成過程は、山内・持田(2022)の研究のなかでも子どもの音楽表現を考えるための有効な手がかりとされている。以下では、吉永(2016)の音楽表現の生成過程を1つの指標として、保育者をめざす学生自身の音楽表現の生成過程に着目したうえで、授業実践から得られたデータの分析を行う。なお学生の音楽表現の生成過程について検討することの有用性は先にも述べたとおり、保育者をめざす学生が、子どもによる表現にいっそう寄り添うことができる授業を考案できる点にある。

3. 授業実践の概要

学生の音楽表現の生成過程について検討するために、1年生対象の必修科目「保育内容(表現)」という授業科目を取り上げる。本授業は、音楽や造形などの各表現分野をまたぐものであり、創造性を育むために科目横断的に造形と音楽を結びつけた創作活動を取り入れ、学生自身が表現することの楽しさを感じつつ音楽表現することを目的とするものである。

3-1. 授業実践の対象

A短期大学保育者養成課程1年生37名(男2名、女

35名)を対象に、授業を実施した。後から分析・考察を行うため、学生は授業後に振り返りシートを提出する。倫理的配慮に関して、授業の最初に一連の取り組み内容とその成果について論文として発表することの了承を得ている。また、振り返りシートの記述内容は授業評価に影響しないこと、個人情報に関する事項については明かさないことを伝えている。

3-2. 「保育内容(表現)」における創作活動

2021年10月から2022年2月にかけて開講された必修科目「保育内容(表現)」は、複数の教員で担当する授業科目である。全15コマのうち、5コマ目から7コマ目が本研究にかかる筆者担当の授業実践である。この3コマの授業の科目横断的な創作活動のねらいは4つある。①音楽表現の生成過程を体験すること、②子どもの表現理解に近づくこと、③自己と他者の実践を比較しながら多様な表現に気づくこと、④学生自身が表現することの楽しさを感じることである。

筆者担当授業の3コマ(5コマ目から7コマ目)の大まかな授業内容を以下の表1に示す。

表1 授業内容

第1回) 音の存在にはどのようなものがあるのかを感じるためにイヤークリーニングを行う。 絵本『ミリーのすてきなぼうし』の読み聞かせを行い、絵本からインスピレーションを得たうえで、創作したい帽子のスケッチを描く。そのスケッチを基に帽子の創作を行う(造形表現)。
第2回) 第1回)で創作した帽子から創造できる音づくりを考える(音楽表現)。音づくりを行う際、身近にある自然物、生活素材、楽器等を用いた音楽表現にする。
第3回) これまでに創作した造形表現・音楽表現を発表する。発表の様子は録画する。 第1回)～第3回)の創作活動の振り返りを行いながら、子どもの音楽表現について理解を深める。

第1回(5コマ目)では、まずはレーモンド・マリリー・シューファー(Raymond Murray Schafer 1933-2021)の提唱するサウンド・エデュケーションの課題のひとつであるイヤークリーニングを行い、身近な環境に耳を傾ける足掛かりとした。次に、きたむらさとし著『ミリーのすてきなぼうし』の絵本の読み聞かせをし、主人公ミリーの創造する帽子や絵本から想像できる音に着目させ、学生自身が作りたい帽子のデザインの構想に移った。『ミリーのすてきなぼうし』では、お金のない主人公ミリーに帽子屋さんが

「大きさも形も色も自由自在。お客さまの創造次第でどんな帽子にもなる」¹⁰⁾ と言って差し出した透明な帽子にミリーが創造力を働かせてクジャクの帽子や噴水の帽子といった様々な帽子を創り出す。そのため、実際に帽子を創造するというところから着想を得て造形と音楽につなげて音楽表現の生成過程を経験することができると考え、この絵本を題材とした。

第2回（6コマ目）に、デザインをもとに帽子を創作し、その帽子から連想される音づくりを行った。音づくりについては、身近な素材を使って音を創り出すこととした。素材は、牛乳パックや砂、コップ、水、ラップの芯、新聞紙等である。加えて、身体を使って音を奏でることも可とした。

第3回（7コマ目）では、創作した帽子と帽子から創造した音楽の発表を行い、振り返りを実施した。

4. 振り返りシートの分析と考察

4-1. 分析手法

本授業実践の振り返りシートは、200字から500字程度という点で比較的小さな質的データである。この質的データを分析するにあたり、比較的小さな質的データの分析にも有効とされる4ステップコーディングによる質的データ分析手法¹¹⁾を用いる。振り返りシートの記述から導き出されるテーマ・構成概念から理論記述を行い、学生の音楽表現の生成過程の理論化を試みる。

具体的には、振り返りシートの記述を内容に応じてセグメント化しコーディングを行い、構成概念を形成する。形成した構成概念からストーリーラインを生成し、そこから理論記述を行うことで理論化を図る。例えば、表2のように、1つの記述内容を6つにセグメント化し4ステップのコーディングを行い、コーディングで得られた構成概念からストーリーラインを生成する。このようにして生成したストーリーラインから理論記述を行う。

表2 4ステップのコーディングとストーリーラインの生成例

番号	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
1-1	1回目の講義の中で、絵本のイラストとそれが出すであろう音について考えました。音を頭の中でイメージすることはできるけど、文字に起こしたり、自分で表現したりすることは難しかったです。脳内のものを外に表現することの難しさを改めて感じました。	音を頭の中でイメージすることはできるけど、文字に起こしたり、自分で表現したりすること	想像した音を言語的あるいは物的に表すことが難しい	考えと表現が一致しない。	音での表現を考えた時、想像したことを実際にアウトプットすることが難しい。	吉永の提唱する音楽表現の生成過程には当てはまらない場合、学生が困難を抱えている。
1-2	また、グループ共有では「そんな方法もあったんだ!」というような新しい気づきに出会い、人によって受け取り方の違いについて感じる事ができて楽しかったと思います。	グループ共有、受け取り方の違い	他者との共有、感受の相違が発生している	新しい発見として肯定的に捉えている。	<ul style="list-style-type: none"> 他者との共有によって、表現方法の多様さや想像の幅広さに気づく。 他者との感受の相違を肯定的に受け止めている。 	
1-3	帽子制作では、帽子と音を組み合わせることが難しかったです。	帽子と音を組み合わせること	モノを見て音を実体化すること		モノを見て音づくりを行うことが難しい。	音を組み合わせる上で帽子を題材とすることは課題がある?
1-4	イチから考えて表現することは素材を工夫することも合わせて大変だったけど、さまざまな工夫をし、材料を組み合わせることで自分の満足いくものができたと思います。画用紙を花の形に切ることが大変でした。花の大きさを変えることで、花畑のような自然さを表現しました。色々な画用紙を使って楽しく作ることができました。	イチから	何もないところから	造形表現と音楽表現では表現の生成過程に違いがある。	<ul style="list-style-type: none"> 造形表現は素材に工夫を凝らし作成することができる。 表現する過程を経て達成感と楽しさを感じることができる。 	造形表現は「感じる営み」から「考える営み」へ移る際にその工夫と同時に、循環がみられる。音楽表現では、「感じる営み」あるいは「考える営み」が発生しない。障害がある?
1-5	音は鈴のみで面白みに欠けていたと思いました。	音は鈴のみ	単純な音楽表現	音の組み合わせが思い浮かばない。	音の表現の思案の段階で音の組み合わせや創意工夫まで至らない。	
1-6	他の人の発表を見て、物どうしを合わせたり、自分の身体を使ったりと色々工夫できることに気づきました。	物どうしを合わせた	音の組み合わせ		他者の表現から音の組み合わせや工夫の仕方を発見する。	
ストーリーライン（現時点で言えること）		帽子の創作を行う上で、造形表現では吉永の提唱する音楽表現の生成過程の循環が行われている。しかし、帽子の音を考え、音を創造する音楽表現では、その音の組み合わせが思い浮かばない、あるいは音を想像することができないといった障害が生まれている。アウトプットする方法に困難さがみられる。				
さらに追及すべき点・課題		<ul style="list-style-type: none"> 何が障害として生じているのか? ・学生自身にある音の組み合わせの体験が少ない? 子どもの音楽表現の生成過程は素材で単純なものが多いが、学生はより考えが難解になることが音楽表現の妨げになっている? 				

4-2. 分析結果

本授業で提出された振り返りシートのデータ36のうち、音楽表現の過程にかかわる記述があった14のデータを分析し、理論化した結果、本授業実践における学生の音楽表現の生成過程には主に3つのパターンがあることがわかった。

1つ目は、吉永（2016）の提唱する生成過程を辿る

パターンである（表3）。この場合は、音楽表現を行ううえで悩みや葛藤がみられず、創作した帽子から感じ、考え、音楽表現へと至っていた。さらに、このパターンでは、音楽表現へと至った後に、そこから「感じる営み」と「考える営み」が行われ、再度音楽表現が生まれるという生成過程の循環がみられる場合もあった。

表3 音楽表現の生成過程における1つ目のパターンの分析

番号	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
2-1	自分は、メキシコのイメージで、マラカスのお面を作りました。音はペットボトルにBB弾を入れてマラカスが鳴っている音を表現しました。身近なものを組み合わせることにより、よりその音に近いことを表現できると分かり、学習になりました。	マラカスのお面、マラカスが鳴っている音、身近なもの	造形物、既存の楽器の音を模す、生活素材	音楽表現を行うときに、困難を抱えていない。	造形物から感じ、考えることで音楽表現を行うことができています。	なぜ音楽表現が円滑に進んだのか？
2-2	また、自分の作品だけでなく、クラスメイトの発表を聞いて、思ってもいないような新鮮なアイデアを見て、クラスの仲間から知ることができました。一見、ただの菓子箱であっても、工夫することで、馬の走る音を表現したり、物を全くつかわず、手を叩いて、はじける音を表現したり、考え方次第によって、音をより近い音を表現できるという事に気付くことができました。	クラスメイトの発表、ただの菓子箱、手を叩いて、より近い音、気付く	表現、生活素材、身体を楽器と扱う、イメージした音に近い音、発見		他者の表現から新たな表現方法を学ぶ。	
ストーリーライン（現時点で言えること）		吉永の提唱する音楽表現の生成過程に沿って、創作した帽子から感じる・考えることで身近な素材を称して音楽表現を行うことができています。				
さらに追及すべき点・課題		音楽表現が円滑に進んだ要因が判然としない。				

2つ目は、「感じる営み」から「考える営み」に移行した際に、「考える営み」で困難を抱え、学生本人が納得のいく表現に辿りつかないパターンである（表4）。この場合、音のイメージは湧くものの、素材の

組み合わせが構想出来ないことから満足のいく表現につながらないという点で困難が発生していた。ここの躓きとしては、感じたものを実際に表す方法が発見できないということが原因として挙げられた。

表4 音楽表現の生成過程における2つ目のパターンの分析

番号	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
3-1	帽子の音を考えてみて、どういった音がしているのか想像するところまでは上手くいきましたがその音をどのような素材を使ってどのように鳴らすのかを考えることが難しいと感じました。	どのような素材を使ってどのように鳴らすのか	素材の組み合わせ・音楽表現の方法	「感じる営み」から「考える営み」へ移行している。	・音のイメージは湧くものの、素材の組み合わせが構想出来ない。	感じたものを実際に表す方法が発見できないことが原因？
3-2	楽器を使っている方も多く、楽器を使っても楽しそうであったなと感じました。ボイスパーカッションのように口で表現している方もおられ、すごい技術だなと感じました。楽器を演奏する技術や体で演奏する技術は身につけておく魅力的だなと感じました。	楽器を演奏する技術や体で演奏する技術	表現方法		他者の表現から新たな表現方法を学ぶ。	
3-3	椅子をたたきだけでも何個か表現があって（雨・電車）身近なものでもできるので保育室の中で子どもが音に気づけるよう働きかけてみることも面白いかもしれないと考えました。	何個か表現、働きかけ	表現の多様さ、環境を構成する		<ul style="list-style-type: none"> ・表現の多様さを発見する。 ・音楽表現をすることで、音の存在に気づくことのできるような環境構成への視点をもつことができる。 	
ストーリーライン（現時点で言えること）		吉永の提唱する音楽表現の生成過程の「感じる営み」から「考える営み」への移行が起こっている。しかし、「考える営み」のなかで、感じたものを音楽表現として表出できない困難があり、満足に表現することができていない。				
さらに追及すべき点・課題						

3つ目は、「感じる営み」と「考える営み」が発生せず、表現に辿りつくことに困難があるパターンである（表5）。このパターンでは、自身の作成した帽子から音を連想することができず、「感じる営み」と

「考える営み」が行われていなかった。そのため、他の学生の発想や教員からの助言を受けて表現を行っていた。困難の原因としては、これまでに音楽表現を行うという経験が乏しかったことが挙げられた。

表5 音楽表現の生成過程における3つ目のパターンの分析

番号	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
4-1	今回行った自分で作ったものをどう音で表現するのかを考えて、創り出すということが初めてだったので最初はどうかしたら良いかわからなかったけど、友達と色々な物を組み合わせたり、先生からのアドバイスで自分の表現したかった納得のいく音を出すことができたので良かったと思います。	どうしたら良いかわからない、先生からのアドバイス	戸惑い、教員の助言	学生だけの力では、「感じる」と「考える営み」が発生しない場合がある。	帽子から音を連想することができないために、「感じる営み」と「考える営み」を行うことができない。表現を行うためには、他の学生の発想や教員からの助言を受ける必要がある。	これまでに音楽表現の経験がなければ、表現することが難しい？
4-2	また、他の人の発表を聞いて自分では思いつかないようなものを作っていたり、組み合わせさせていたのですごいなと思いました。	他の人の発表	他者の表現		他者の表現から新たな表現方法や素材の組み合わせを発見する。	
ストーリーライン（現時点で言えること）		「感じる営み」と「考える営み」が発生せず、音楽表現に辿りつくことに困難がある。帽子から音を連想することができないために、「感じる営み」と「考える営み」を行うことができない。表現を行うためには、他の学生の発想や教員からの助言を受ける必要がある。				
さらに追及すべき点・課題		音楽表現を行ううえで、これまでの音楽表現の経験がかかわってくる？				

本授業では、まず学生が絵本に登場する様々な帽子を見ることから始まり、その次に造形表現と音楽表現を行った。音楽表現においては、すでに示したとおり生成過程には3つのパターンがあり、必ずしも吉永（2016）の提唱する生成過程を通るわけではなかった。ここで科目横断的な授業であったという観点から、他方、造形表現について言及しておく。造形表現の場合、絵本あるいはスケッチから「感じる営み」と「考

える営み」へ移行し、必要な素材を使って創作に入ることによって表現を行い、さらにその表現において感じたものから「考える営み」に循環していくなかで素材の工夫を追及する過程がより多くみられた（表6）。つまり造形表現の生成過程については、音楽表現のそれと比較して、吉永（2016）の提唱する生成過程を辿りやすいと考えられる。

表6 吉永（2016）の音楽表現の生成過程をもとにした造形表現の生成過程の分析

番号	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
5-1	ぼうしを作る際のデザインはあまり悩まずに結構すぐ考えることができました。デザインを考えていく上で、描きながら浮かんできたアイデアをそのまま採用しました。作りながら難しいと思ったのは、リスの顔の輪郭でした。丁度良い大きさで、かわいく作成するには、輪郭の土台作りが大切だと思いました。	ぼうしを作る際のデザイン、あまり悩まず、	スケッチ、葛藤がない	表現する過程なかで、吉永の音楽表現の生成過程の「感じる営み」と「考える営み」が発生し、工夫がなされている。	造形表現を行うとき、葛藤をもつことがない。帽子のスケッチから表現を行い、その表現過程では工夫がみられた。	
ストーリーライン（現時点で言えること）		造形表現を行うときに葛藤をもつことなく表現を行うことができている。さらに、その表現の過程では、表現したものから「感じる営み」と「考える営み」が生まれており、その過程を経ることで造形表現の工夫がなされている。				
さらに追及すべき点・課題						
6-1	帽子作りを振り返って、最初に空想の帽子の絵本を見た時、主人公がとても子どもらしくて、空想の帽子を売ってくれたおじさんは、女の子の創造の世界を壊さず、むしろ発展させてくれるような言葉がけをしていて、とてもあたたかい物語だなと感じました。	空想の帽子の絵本、女の子	絵本『ミリーのすてきなぼうし』、子ども（主人公）		絵本『ミリーのすてきなぼうし』の中の子ども（主人公）への言葉かけに注目している。	
6-2	そして、絵本の中の帽子は、普通は帽子の素材にしないようなものが帽子になっており、私も帽子を作る際は帽子の素材になかなかならないような、季節を表そうと思いました。	帽子を作る	帽子を創作する	絵本の中にある帽子という表現物を見たことが吉永のいう音楽表現の生成過程の「表現」にあたり、ここから「感じる営み」と「考える営み」に移行している。	帽子の創作をするにあたって、絵本から影響を受けている。	

6-3	帽子作りについては、私の誕生日が6月で、梅雨ということもあり、テーマは梅雨にすることにしました。そして、梅雨の時期はアジサイやかたつむり、傘や水滴など様々な要素を全て盛り込もうと思いました。それで考えているうちに、私が子どもの頃に想像していた帽子の上に傘のついた帽子を作ってみたくなり、実際に作ってみました。	帽子作り	帽子の創作、造形表現	造形表現においても、吉永の音楽表現の生成過程を辿っていることが窺われる。	帽子を創作するという造形表現においても、吉永の音楽表現の生成過程を参考にして表現過程を辿ることが可能である。造形表現をするうえで「感じる営み」と「考える営み」を行うことに葛藤がみられない。	
ストーリーライン(現時点で言えること)		造形表現においても、吉永の音楽表現の生成過程を基本として表現の生成過程を辿ることが可能である。絵本の中にある帽子という表現物を見たことが吉永の音楽表現の生成過程の「表現」にあたり、ここから「感じる営み」と「考える営み」に移行している。「感じる営み」と「考える営み」を行う際に葛藤がみられず、吉永の音楽表現の生成過程を円滑に辿ることができている。				
さらに追及すべき点・課題		造形表現をするうえで、なぜ戸惑いや葛藤をもつことなく音楽表現の生成過程を辿ることが可能なのか？				

4-3. 考察

分析結果から、学生が悩みや葛藤をもつことなく音楽表現を行うことができた場合は、学生の音楽表現は子どもの音楽表現の生成過程を辿るパターンとなりうる。そのほか、音楽表現をするうえで学生が悩みや葛藤をもち、「感じる営み」あるいは「考える営み」において困難を抱える場合がある。例えば、感じたものを実際に表す方法が発見できないこと、音を連想することができないこと、これまでに音楽表現を行うという経験が乏しかったことなどが挙げられる。そこで、これらを解消するための今後の授業展開として、今回の授業実践で行ったような創作を行う前に、次の4つの授業を学生の実態に即して行うことが考えられる。ただし学生の実態によっては、これら4つの授業を創作後に行うことが効果的な場合もあろう。

1つ目は、学生が身の回りで鳴っている音を自覚的に捉え、インプットを蓄えることができる授業を行うことである。例えば、学生が川沿いを歩いたり山を散策したりするなどして、自然の音に耳を傾け、周囲で鳴っている音をサウンドマップのように書き出し、自覚的に音を捉えるという授業である。

2つ目は、素材から創り出すことのできる音を探求することができる授業を行うことである。例えば、砂や小石、紙コップ、ペットボトル、空き缶、ビーズ、豆などを教員が用意して、それらを使って鳴らすことができる音を可能な限り学生に探求させる。音の探求の例としては、ペットボトルに砂を入れて振ったり、小石とビーズを入れて振ったりするなどがある。音の探求をすることで、学生自身が素材の組み合わせを考えることができる。

3つ目は、音楽表現とは具体的にどういったものであるのかを学生が体験することができる授業を行うこ

とである。例えば、学生が手づくり楽器を製作し、その楽器を使って即興演奏を行い、音楽表現を体験することができる授業がある。

4つ目は、音楽表現には、実際に鳴っている音を表現する場合と、想像した音を表現する場合があることを、学生が体験あるいは知ることができる授業を行うことである。例えば、実際に鳴っている音を表現する場合には、オーシャンドラムなどの擬音楽器の製作がある。想像した音を表現する場合には、例えば「海」というテーマで創られた様々な音楽を聴き、どのように作曲者が表現しているかを知ることが考えられる。

音楽表現に対して困難を抱える場合に対応するための授業展開について簡単に述べた。重要なことは、こうした授業を通して、学生が自身の音楽表現の生成過程について自覚的になることである。授業を通して、音楽表現にかかる手段を知ることが、自身が音楽表現に行き詰まる要因がどこにあったのかを考える一助になる。それは学生が自身の音楽表現の生成過程に関して自覚的になり、自身の音楽表現を振り返ることに通ずるのである。ここでの自覚的な振り返りは、学生が保育者となった際に、音楽表現に戸惑っている子どもへの具体的な支援につながっていくと考えられる。加えて、子どもの音楽表現の生成過程とはどのようなものかを知ることが、重要なことである。音楽表現には、既存の楽器だけでなく、周囲の音素材、五感から感受する環境整備が要点になる。上述のような授業で学生自身が音楽表現を経験することで、そうした環境整備の必要性に気づくきっかけがつけられる。それは、子どもの音楽表現の生成過程をもって子どもが音楽表現を楽しむことについて知ることにつながっていくと考えられる。

5. まとめ

本研究において、学生の音楽表現の生成過程を考えるうえで吉永（2016）の提唱する音楽表現の生成過程は有効なものであり、この生成過程を基本として学生の音楽表現の生成過程を辿ることが可能であることがわかった。そのなかで、学生の音楽表現の生成過程は子どもの音楽表現の生成過程と似通っている面があることが示唆された。ただし、子どもの音楽表現の生成過程に辿り着くまでに学生が困難を抱える場合があるのであって、その困難に教員が気づき、解消するための適切な支援策を講じることで、学生が保育者になった際に、子どもの音楽表現の生成過程に寄り添うことが可能となると考えられる。その際、アプローチを考案するきっかけとして、学生の音楽表現の生成過程のパターンを提示できたことは意義的であった。子どもの音楽表現の生成過程と比較して、学生の音楽表現の生成過程の各パターンがどのように異なっているのかが示されることで、保育者をめざす学生が、子どもの音楽表現の生成過程に寄り添うことに通ずる授業構成の具体を検討できるのである。

本研究では、帽子という同じ題材を用いて造形表現と音楽表現を行い、本授業実践における学生の音楽表現の生成過程を考えた。今後の課題としては以下が挙げられる。

音楽表現をする過程では、帽子のスケッチや造形表現を見て「感じる営み」が発生しない場合があり、こ

れに対しては、①「感じる営み」が起こるような仕掛けや授業構成を考えること、②帽子から発想して音を作り出すという題材設定が学生の表現の困難を生んでいる可能性を検討することが課題である。研究の手法については、③より詳細なデータを得るためにインタビューから分析を行うことが検討できる。

これらのことを踏まえ、題材の変更などを考慮しつつ、授業実践とその分析・検討を行い、学生の音楽表現の生成過程を辿る調査を継続していきたい。

参考文献/引用文献/脚注

- 1) 吉永早苗 (2016)『子どもの音感受の世界一心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探求』萌文書林、p.21。
- 2) 安藤恭子 (2021)「音楽聴取の実態と身近な音に対する意識との関連—保育者養成校の学生を対象とした質問紙調査から—」『保育文化研究』第12号、pp.51-52。
- 3) 前掲書2)。
- 4) 前掲書1)、p.22。
- 5) 前掲書1)、p.24。
- 6) 前掲書1)、p.25。
- 7) 前掲書1)、pp.24-26。
- 8) 前掲書1)、p.25。
- 9) 山内信子・持田葉子 (2022)「幼児の『表現する過程』を読み取る保育者の養成—身の回りの音に着目した授業実践の検討—」『保育文化研究』第14号、pp.95-104。

An Attempt to Trace the Process of Generating Students Expression in the Nursery Teachers College: From the Difference Between Modeling Expression and Musical-Expression Based on Picture Books

Akemoto Haruka*

Abstract

This study was conducted with consideration of the musical-expression generative processes of children as proposed by Yoshinaga (2016), with the aim of newly clarifying the trajectories of musical-expression generative processes among students. A class was implemented that included creative activities involving a cross-disciplinary linkage between plastic arts and music, in order to foster student creativity. On the basis of said class, a qualitative data analysis was performed using four-step coding. As for the results, inasmuch as the students performed plastic arts expression, it can be said that there was the general occurrence of the musical-expression generative processes of children as proposed by Yoshinaga (2016). In musical expression, we learned that there was a division into three patterns of musical-expression generative processes, including the generative processes of Yoshinaga (2016). These results suggest that there are aspects of similarity between the musical-expression generative processes of students and said processes of children, and that in the trajectory of the musical-expression generative processes of students, it is effective to consider as a base the musical-expression generative processes of children as proposed by Yoshinaga (2016). Further, our study obtained the result that students do not perceive difficulties in expression among the patterns that trace the musical-expression generative processes of children in Yoshinaga (2016). In the other patterns, there were cases where students had difficulties in reaching the level of the generative processes of musical expressions of children. If the teacher becomes aware of such difficulties, by teaching support strategies for eliminating said difficulties, when the students themselves have become preschool teachers, it is thought that they will be able to follow closely and provide support for the musical-expression generative processes of their child pupils. This served as the basis for devising concrete approaches and was meaningful in that it enabled an indication of the patterns of musical-expression generative processes of students. In comparing the musical-expression generative processes of children with said processes of students, by showing how each pattern differs by comparison, students aiming to become preschool teachers can examine concrete class/course configurations that closely follow the musical-expression generative patterns of their child pupils.

Keywords: generative processes of musical expression, students, expression

*Osaka College of Social Health and Welfare, Department of Child Care and Education

